

心理学専攻

第14回コロキアムのお知らせ

下記のとおり、第14回コロキアムを開催いたします。どなたでもご参加いただけますが、博士課程の学生は必ず参加してください。博士課程の学生以外の方もぜひ積極的にご参加ください。

記

日時：10月6日（木） 18時10分より

場所：三田キャンパス南校舎6階 465番教室

発表者：粟津 俊二（実践女子大学人間社会学部准教授 / 慶應義塾大学大学院社会学研究科訪問准教授）

題目：言語理解の身体性に関する認知科学・認知神経科学的研究の現状と展望

概要：人の言語理解過程は、認知心理学あるいは認知科学で大きな研究テーマとされてきた。近年では、記号接地問題の提起 (Hernad, 1990)、ミューラーニューロンの発見 (Rizolatti, 1996)などを契機として、言語と知覚運動表象との関係が盛んに研究されている。

言語理解と知覚運動表象の関係を説明する仮説として、知覚的記号システム理論 (Barsalou, 1999)がある。この理論では、語や文を認識すると、その文や語が意味する状況を実際に経験したときと同じ知覚運動表象が活性化し、シミュレーションが行われ、それによって語や文が理解されると考える。

2000年頃から、文や単語の理解時に、知覚や運動に関わる脳領域が活性化している実験的証拠が、行動実験においても脳機能画像研究においても蓄積されてきた。例えば、Glenberg & Kaschak (2002)は、行為文(引き出しを開ける)の有意味性判断をさせると、その文で示された行為方向(手前方向)への反応時間が早くなるという文・行為一致効果を示した。

Hauk, Johnsrude, & Pulvermuller (2004)は、顔動作(lick)、足動作(kick)、手動作(pick)を表す動詞を読むと、それぞれの動作に対応する運動野、運動前野が活動することを示した。

本発表では、言語理解に知覚運動表象が使用されているとの立場から、現時点までの行動実験および脳機能画像研究を発表者本人のデータも含めて概観し、今後の展望について述べる。

以上